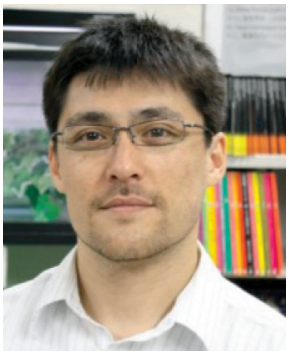
2021.5.13　No.76

文教大学の授業

文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
℡ 048-974-8811 〒343-8511

「自分で英語学習ができる学生」を育てる英語授業

教育学部　福田スティーブ利久



神奈川県米軍基地で生まれ、長崎県とオハイオ州に実家をもつハーフ。アメリカンスクール卒業後、引っ越し会社→建設業者→旅行会社に勤め、大学入学のために日本に帰国。教育歴は長崎ウエスレヤン大学（学士）→愛媛大学（修士）→Walden大学（博士）。教員歴は鎮西学院高校→愛媛大学→徳島大学→文教大学。趣味は教育学、心理学、経済学の分野をベースに小・中学校の授業デザイン。その研究を基に、ここで紹介する共通教育の授業の他に専修のコミュニケーションや教職系の科目を担当。
（フクダ　スティーブ　トシヒサ）

授業名は「英語I」。カリキュラムでは共通養科目→外国語科目の位置づけ。必修科目4単位のうち2単位の授業。英語専修生が1年次の1学期に受講。授業目標にしているのは英語力そのものと、生涯を通して自律的に効果的な英語学習ができる人材の育成。（一応、受講生は教職を目指す教育学部生なので、「優れた教師は優れた学習者でもあるべし」との思いもあります。）

右の画像は受講者28名での「英語Ｉ」の授業風景です。画像の中央を見ると「学生が全然いない、サボっている」「こんな授業をする先生はクビだ」と思われても仕方ないかも、ですね（笑）。

「大学1年次・1学期の英語の授業」と聞くと、皆さんはどのような授業内容・目標を想像しますか？学会や研修会で参加者に聞いてみると、100％の確率で、①高校の総復習、②言語の基本となる文法・語彙・発音、③日常的に使える英語、といった答えが返ってきます。しかし、私の答えは異なります。大学での英語の授業は、「学校教育でエキスパート教員との最後の授業」です。外国語は、学校教育を終えた後も学び続けないと、能力が落ちたり、語彙や文法の内容を忘れたりするため、これまで約10年分の英語学習に費やしたエネルギーと時間が無駄になります。従いまして私の答えは、「一生涯、効果的に英語を学び続けられるスキルの育成」です。

次は、周りを囲んでいる各画像をご覧ください。受講者は異なるテキストを使用し、一人ひとりが、異なる学習目標を達成するために学習している姿、あるいは、自分が決めた場所で学習をしている姿が見られます。実はこれらが、「英語Ｉ」の本当の授業風景を表しています。

同じ授業を最大58名で実践したことがあります。受講者が多くなればなるほど、英語

力や学習目標の差が顕著になりますので、授業内容や目標の統一はできなくなります。目標を誰かの基準に合わせてしまうと、他の受講者たちには不公平になるためです。私は一人ひとりの学生に各自の課題の学習を任せた方が、より大きな成長に繋がると考えており、それを目指すために、「自律英語学習者育成」の教養教育シラバスを開発しました。実践の結果、学習者の授業外学習時間や動機づけの向上だけではなく、自分の授業目標の設定や、教科書の選定など、多くの教員が抱える悩みを払拭できました。

英語の学習には、きわめて多くの時間・労力がかかることは言うまでもありません。例えば、仕事で英語を支障なく使えるようになるまでに、高校卒業後、少なくとも1,200時間の学習が必要であるとされています。しかしながら，大学生の1日あたりの授業外学習時間は僅か40分程度と報告されています(英語学習に限らず全科目の合計値)。この数値からも、大学生が英語学習にほとんど時間・労力を割いていない現状が分かると思います。理由はいたって簡単で、「メタ認知力」（例：自己調整力や自己学習力）がない学生は、学習時間や学習動機などに、多くの課題を抱えるようになるためです。

本授業は「学びのサイクル（①将来像を描く→②目標を設定→③計画を立案→④計画を実践→⑤計画を評価・修正→①に戻る、というPDCAサイクル)」を、授業内外で何度も繰り返す経験に基づいた「英語学習の習慣化」を目指して、週１回・全15週の授業を、3期(指導期・実践期・自立期)、各５週間ずつに分けて実施します。「指導期」では，学生が自らの学習を計画します。具体的には、学習目標とそれを達成するための学習活動、学習パートナー(誰と学習・振り返りをするか)、学習教材、授業内外の学習時間・場所など決めます。以下はその一例です。

プロジェクト名称：目指せ!英語でDiscussion力！
目標：あるテーマのDiscussionで、意見を3分間以上述べ、発言・質問を各3回以上行う。
授業の計画：グローバル・イシューについて意見を考える→討論の実践→出てこなかった英語表現を調べる→授業外で英語ニュースを観て、 感想を英語で準備する。3分間スピーチの練習。
見出した課題・解決策：考えがすぐに英語で出てこない／自分の考えをスムーズに表現できない→言いたいことをメモしてから発言する。英訳できない単語や表現がある場合は、別の表現に置き換えられないかを考える。
授業の感想：自主的な学習を確立するのに本当に役立つと思う!自分が変わるきっかけになっています。

授業中の私の役割は「学習コーチング」です。「導入期」では，学生と信頼関係を築き，英語学習に興味を持たせる活動などを通して、各自が英語を学習する意義を見出すように手引きした後、学習計画を一緒に立てます。理想は、「実践期」において学生が学習計画を完成し、実践できるようになることです。中には、この過程に6週間以上を費やす学生もいます。更なるコーチングが必要な学生には個別指導を行います。個別指導の際は、学生が達成感を味わえるような学習課題を最初は教員から出し、徐々に学習内容を学生自身で決められるように導きます。そして、「実践期」「自立期」においては，授業内外の英語学習をモニターしながら、全体／小グループ／個人に向けて、学習効果を高めるフィードバックを与えるようにします。

本授業ではこのように、学生は主体的（自己の目標設定、学習計画の立案等)、対話的(授業時における学生同士のコーチングや相互評価等）に学び，それを深い学び（知識・技能を振り返り、応用する方法を見つけたり、学習自体の振り返りや学びを調整する等）に繋げたりして、英語学習力を高めています。刮目すべき結果は、単位取得のために大学設置基準が定めている授業外の学習時間も学生が確保できたことや、卒業後も自己の英語学習を継続できている、という嬉しい報告をもらえていることです。

その場限りの知識・技能の獲得のための学習で終わらず、生涯に亘って自分自身で英語学習を継続できるような「学び続ける力」を学生に育む授業―思い返せば、自分はこうした授業を行うために教員になりたかったのです。